

---

# 虎と子猫

吉野燈夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

虎と子猫

### 【Nコード】

N0019R

### 【作者名】

吉野燈夜

### 【あらすじ】

学校からの帰り道、突然事故に遭ってしまった私。気付いたら子猫になっていた。しかもかなりのピンチ！？ このまま丸呑みか、というところを助けてくれたのは……？ / 短編でしたが、連載になりました。一話は短編と殆ど同じです。

## 1 始まりは腹痛から（前書き）

短編とはそんなに変わってません。加筆修正も一文くらいで、後は改行や漢数字の修正くらいですので、短編既読の方には申し訳ないです。

## 1 始まりは腹痛から

すっごくお腹痛い。

車にぶつけられたから、という理由からではなく、胃腸風邪のせいで。もしかするとノロかもしれなかったけど、私には確認する術なんてもうなかった。

これから病院行くとしても胃腸科じゃないでしょ、絶対。

早退する途中で、信号無視の車に突っ込まれて、おしまい。花の女子高生がこんな終わり方でいいのか！ 健康な状態ならこんなことなかったと思うから尚更口惜しい。

うう。死体が、吐瀉物まみれだったら、イヤだな……。

なんて考えながら、意識はフェードアウトした。

どろり べちゃべちゃ

ん？ なになに？ なんなのこの音。しかもなんか臭い。え、最悪の予想ドンピシャ？

そろりと目を開けてみると、寝ているのかやけに地面が近い。しかも、体が気持ち悪い。首を捻りつつ前足<sup>手</sup>を動かして視界に入れると、黒い毛並みがどろりと何かで濡れている。

……………毛並み？ 毛並み!?

驚いて飛び上がる。掌には肉球も確認。隣の家の子猫（猫）とそっくりのそれに、私は確信した。

私これ、猫だ。

愕然としたその時、背後からシューシューと嫌な鳴き声があった。嫌な予感に、こんな毛並みでなければ冷や汗が流れたに違いない。恐る恐る振り返ると、やはり予想通りというかそれ以上の巨大な蛇が口を広げて待っていた。

「ミギヤーツ！」

人生初の四足歩行で全力疾走する。何度も脚をもつれさせそうになるが、気合いで走った。しかし、まず大きさが違う。いくら相手が蛇だからといっても追いつかれるのは時間の問題かもしれない。だって、多分子猫<sup>私</sup>の十倍はあった。

体力ももう限界に近付いていて、そういえば、胃腸風邪どこいったのかなあ。なんて現実逃避しかけた時だった。

その影が現れたのは。

日に輝く白い毛並みが美しい、大きな虎だった。

それは藪の中から躍り出て、大蛇の喉元（蛇に喉という物があるのかは疑問だけど）に食らいついた。太い前足で頭と長い胴を抑え、尾が暴れ出す前に咬み千切る。飛んだ頭部が目の前に落ちて鋭い牙を見せたので私は悲鳴を上げてしまった。

そこで初めて、その真っ白な虎は私に気付いたのだろう。金に輝く瞳をこちらに向けた。死んでいると理解しつつも蛇の頭部は恐ろしかったのでそろそろと移動する間も、その目は私をじっと見つめ続けている。

まだまだピンチ？ 虎って肉食！？ 肉食ですよーね！

「みゃ、みゃーお」

食べても美味しくないですよーと切実な訴えを込めて語りかけて

みるが、反応は無し。猫語と虎語は別!? 両方猫科だからという安易な考えは駄目ってこと? た、食べられちゃう?

びくびくして逃げる気も沸かなかつた。だって、あの大蛇を一発で仕留める俊敏さ! 頭なんて私の遙か頭上にあるから見上げなければならぬ。

やるならいつそ一思いに! と覚悟して目を瞑るけど、衝撃は襲ってこない。やっぱり猫科の好よしみで大丈夫だった? と考えた瞬間、ぱくりと首根っこを啜えられた。そして続く浮遊感。ぶらん、ぶらんと揺れる。

別の場所で食べられちゃう? 虎穴には沢山の虎児!? スプラッタ決定!? 嫌だーっ。

なんて考えても、鋭い歯が突き刺さりそうだから髪の毛一本も動けない。うっ、怖いよう。

ぼしゃん、と頭まで浸けられたのは小川。水の流れて洗うように左右に振られる。息継ぎに水揚げされ、また沈められるのを数回繰り返される。近付いていたからそうかなとは思っていたけど、いきなりで驚いた。

蛇の唾液付きなんて食品衛生上良くないんだよねきつと!

しかし洗濯の後、思いの外丁寧に地面に下ろされた。もっとぽーんと放られるかと思っていたのに。

しかもっ。

「みゃ、みゃーっ」

べろんべろんべろん

丁寧に丹念に舐められている。鼻先で仰向けに転がされべろべろ。

終わったと思つたらひっくり返されべろんべろん。

ひいひいっ！ これ一体、何事デスカッ！？

正直舐められて洗われたの台無し……いやいや、どうせこれから入る口の中の分泌液だから良いの？

表も裏も舐めまわされてくたになつた私はまた小川へ。その時、漸く私は見た。水面に映された真つ黒い子猫の姿を。

夢であつてほしかった……。

再度の洗濯の最中、私の意識はまた急激に引いていった。

目を醒ました私はどこか洞穴のような場所にいた。小川の流れる音がするからそんなに離れてはいないのだろう。きよきよする私に虎さん（某テキ屋のオジサンみたいだけど、意思疎通ができず名前も知らないのだから仕方がない）はどこから採ってきたのか、毒々しいまでの赤い皮を持った果実を差し出してきた。赤いといっても林檎とかの可愛いものではない。茸なら確実に毒だと断言できる禍々しさに私はぶるぶると震えた。しかし、虎さんは顎をしゃくつて『食べる』の合図をする。

食べないとこちらが食べられる！ ていうか食べてから食べられる？

戦きつつも赤い皮、寧ろ殻おのというべきものに歯を立てるが撃沈する。歯が折れそうな程固かった。それが狙いかと思つた。虎さんはそんな私を見かねてか、その凄まじい口角の破壊力を見せてくれた。正直、食べる気を無くすほどの恐ろしさだった。自分の行く末はあれかと。

砕けた実に口を付けてみると、殻の硬さ、毒々しさに反して柔らかく瑞々しい甘さを持ったなんとも美味しいものだった。メロンのような果肉は白く、純白といって良い程の美しさ。空腹感が一気に

体を突き動かして、一心不乱に食べる。

しかし、美味しいおいしいと初めは勢い良く食べていたが、何分この果実は私の体程の大きさがあった。全部食べきるのは土台無理な話だったわけで。しかも、気付いてしまった。私を太らせてから食べる作戦などではなく、実はこの虎さんはベジタリアンだったのでは！

それなら、丁寧（洗濯は除いて）な扱いも願けるのではないか。虎さんにとって食糧の調達ではなく人命救助だったのかもしれない。

「みゃーん」

ありがとう虎さん、と心からの気持ちを込めて、果実を虎さんの方へ差し出す。

食べ過ぎちゃってちよつと少ないけれど、どうぞ！ 貰い物だけど！

虎さんは一歩近付いて果実に顔を寄せたかと思うと、べろんと一舐めたのはなんと私のほっぺの方だった。やっぱり肉食？

だけど、見上げた虎さんの目が優しくかったので、私は暫く舐められっ放しで我慢した。

それからというもの、虎さんは甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた。毒々しい果実に始まり、様々な木の実、甘い草の根に、綺麗な琥珀色をした樹液を葉に採ってきてくれたりした。生魚を持って帰った時には、ちよつと生は嫌だと遠慮する意を示すと洞穴から出て、帰った時には焼き魚になっていた。

え、なんで？

寝る前と起きた後には、毛に潜む蚤のような虫を取るのに、虎さんが手伝ってくれる。私は自分の体の毛繕いをするのも苦手だから、楽をしているけど、時折心配になる。他人の体に付いた虫って嫌じ



やない？ いや、私だって虎さんが『やって』って言うてくれたらやりますとも！ 今までそんなことは全くなかったけど。

ただ、虎さんと意思疎通は大方できるようになったけど、言葉だけは通じていなかった。やっぱり、虎と猫の壁は大きいのだろうか。

なんて、割と快適な虎さんとの生活も数ヶ月が過ぎた。この世界が私の居たところとは別だということも、虎さんから与えられる食料で理解した。少なくとも日本ではない。

そんな頃、二匹だけの日常に乱入者が現れた。

「こら、ヴァレンディア！ いつまで休暇取ってるつもりだ！ いい加減にしるよっ！」

朝起きてすぐのことだった。私は久しぶりに見た人間の姿に驚き、乱入者は虎が子猫を舐めまわしている状況に目を見開き動きを止めた。そんな中、虎さんだけは乱入者を無視してぺろぺろと私を舐め続けていた。

「ヴァ、ヴァレンディア！ 止める、お前！ そんな小さいのに無体を働くな！」

復活した乱入者は焦った様子で虎さんの背に手をかけたけど、虎さんは全く気にかける素振りもない。

ヴァレンディアって、虎さんのこと？

「みや、みやう」

ぼんぼん、と虎さんの頬を叩くと渋々止めてくれる。だけど、男の人から庇うように背に隠すことは忘れない。

「いつからそんな幼女趣味になったんだ!? しかも、獣形ってお前……構うだろっ!」

独り言かな。虎さんと人間で会話なんてできないでしょう? 幼女趣味? なんでそうなるの?

「もういいっ、無理やり連れて帰るからな!」

乱入者がそう言うと同時に、ぱくりと虎さんに啜えられた。移動時のお決まりポーズだ。この数カ月でそれは安心感をもたらせてくれるものとなっていたけど、今回はかりは久しぶりに危機感と不信感を抱く。そしてそれは乱入者の足元から広がって巨体の虎さんを中心とした、幾何学模様と蚯蚓のようなものが描かれた円によって、事実だと知らしめられる。

光る円と突然の体が引つ張られる感覚に、私はまた意識を失った。子猫になってから、こういうの多くない?

なんか、ふかふかしてる。体と一緒にもう一度意識が沈みそうなくらい。だけど、男の人の声に引き上げられる。両手に力を入れて上体を起こした。

見渡した部屋は、飾り気のないものだった。殺風景だと言っても良い。日本ではなく、欧米をイメージさせる雰囲気のものだ。

首を回して、最後に目に入ったのは、二人の男の人だった。

「お前は杜撰すぎる。彼女の体に負担がかかっただろう」

「ちよっ、待て怒るな！ うわああっ」

「煩い　　目が醒めたみたいだ。命拾いしたな」

話していたのは、乱入者ともう一人。そのもう一人が、私の大きなベッドの側へ寄ってくる。

その男の人は白い髪をしていた。といっても若白髪とかそんな風ではなく、きらきらした銀髪と言うのが正しいのかもしれない。そしてそれは虎さんによく似た色で安心感を与えてくれた。顔は欧米人とかそういう感じで、十人が十人「かっこいい」と言うに違いない美形だった。それがとろけそうな笑みを浮かべている。

な、なんか、眩しすぎる……。

「起きたんだね。大丈夫？ おかしな所はない？ 一応僕も確認したけれど、もしかすると、ってこともあるから……」

段々と心配そうな顔に変わるから、大丈夫だよって言いたくなるけど、如何せん私は猫だ。虎さんとすら会話できないんだから、人間となんてとんでもない。

そういえば、虎さんはどこに行ったんだらう？

「でもまず、君の名前を覚えてくれないかな？」

「私、喋れないから、無理です………あれ？」

普通に話せている。いつも通りの、猫になる前の私の声だ。

「ああ、良かった！ 喉も大丈夫そうだね。可愛い声だ」

「あ、りがとうございます……？」

ぺこりと御辞儀もする。日本人の習性というやつだ。そのついでに、自分の臍が見えた。

……………おへそ？

「みぎゃああああつ」

はだか！ 頭の前から爪先まで子猫の時と変わらずに！

足元に寄せられていたシーツをひつつかみ、胸元まで隠す。いつの間にか人に戻っている。

もしかして子猫は夢？ だけど、ここは病院でもなんでもない。ぼんやりと見えた部屋の調度品などが妙に古めかしい。

「ああ、服か。僕のもので良いかな」

ぱちん、と指を鳴らせると頭上にはさばさと服が降ってきた。白いブラウスのようなものに、黒いズボン。ブラウスを男の人は当たり前のように手に取って広げる。というか、鼻歌まで歌っている！ にこにここと笑いながら、私に言い放った。

「はい。手挙げて？ 着せてあげる」

輝く笑顔。いやいや、無理でしょう、なんて言わせない笑み。だけど、美形でもそれはいただけません！ ムリムリ！ 服は欲しいけど、ムリ！

私は話をそらすことにした。逃げたわけじゃないんだから！

「あつ、あの！ 私と一緒にいた虎さん、真っ白で大きな虎なんですけど、どこへ行ったんですか？」

「ここに」

未だブラウスを広げつつ、男の人が答える。

「はい？」

今、なんと仰った？

「だから、僕は、あの虎なんだ。この数ヶ月、ずっと君と一緒にいた」

呆けた私に上手く理解させるように優しくゆっくりと紡ぎ出された言葉に、頭が真っ白になる。

ぼくが、あのとらなんだ？

あの、虎さん……………？

「あれ？ どうしたの？ ねえ」

頭に過ぎるのは過ぎた日々。たくさんお世話になって、舐められたり、舐めまわされたり、舐めつくされたり……………。

ぺろり

「みぎや ああああっ！？」

舐めた！ 舐められたっ！

シートを引き上げて舐められた頬をごしごし擦る。美形だからって何をしても許されるって訳じゃないんだからね！

私の中でこの自称・虎さんは変態ランキングで堂々の一位になった。虎さんだなんて、嘘だと思いたい……。

「ふふ。可愛い。ねえ、早く名前を教えてね」

これに、名前書かなきゃいけないから。

って、なんですかソレ！

何が書かれているか読めませんが、なんとなく判りますよ！

ああ、またお腹痛くなってきた……。

## 1 始まりは腹痛から（後書き）

ここまでご精読ありがとうございました！

ゆっくりですが、頑張って完結させたいです。

誤字脱字や、感想などあればお願いします。

改めて、ありがとうございました！

## 2 子猫の名前

「僕に君の可愛らしい名前を教えてくださいませんか？」

「教えません」

「寧ろ此処に書いてくれたら嬉しいのだけれど」

「いえ、ちよつと此方の文字はわかりませんので遠慮します」

「では僕が書いてあげるから名前を」

……なんて攻防を、変態からシートを死守しつつ繰り返している時だった。

「ヴァレンディア！ 漸く身を固めると聞いたぞ！」

ばん、と大きな音を立て扉が開き金髪で大柄の男性が入ってきた。扉がぶつかったのか乱入者さんが床に倒れている。可哀想に……。哀れむ気持ちで見つめている間に金髪の男性はベッドの側までやってきていた。

「おお！ お前がヴァレンディアの妻か。確かに犯罪かもしれんな」

その言葉を即座に否定する。

「違います！」

妻ではない！ 犯罪なのは間違いではないけど。私はまだ高校生なんです。親の許可が必要な年齢なんです！

「なんだ違うのか？ 妻が未成年者ならヴァレンディアの年を考えると犯罪になるんだが、そうか。うむ、16歳には見えんが、成人



はしているのか。なら安心だな」

「そこじゃありません！ 妻だっというのが嘘なんです！ 誰からですかそんな情報っ」

根も葉もない！ いや、あるのか？ このヴァレンディアさんが変態だと知らなければ、初対面が人形だったら、整った顔にほいほい騙されたかもしれないけど……。

「嘘なのか？ ヴァレンディアが幼妻を連れて帰ったとエヴァンスが言うから……」

そんな嘘を言った早とちりなエヴァンスさんってどなた？ そういう顔をしていたのが分かったのか、男の人は答えてくれた。

「うちの副議長だ」

へーえ。議会制なのね此処は。地方都市とかそんな感じなんだろう、と考える。あれ？ その副議長のエヴァンスさんのことを尊大な口調で話すこの人は何者ですか？

「邪魔しないでくれないかな、陛下」

ぶすつとしたヴァレンディアさんが横槍を入れる。ああ、いたんですね。消えてくれれば……って、陛下？ 陛下ってあの陛下？ 王様と同意語の？

「別に邪魔はしとらんだろう。何か不都合でもあるのか？」

金髪の人を改めて見てみる。確かに、大柄な体格には王様って威圧感はあるかもしれない。威厳は感じられないけど。だって、ヴァ

レンディアさんタメ口だもの。

「イーガルでさえ僕と彼女の愛の語らいを邪魔しないよう、空気を読んでくれていたのに」

「あれは魔術で拘束をされていたように見えたが気のせいか」

「まさか。気のせいでは？ イーガルは下手な魔術師の拘束には捕まらない実力はあるでしょう」

拘束つて、あのイーガルつて人途中からなんか気配ないなとか思つてただけどそういうことか！ 人の姿では会つて数十分だけ、この人なら有り得ないことではないと思わされる。その気になれば、私だつて……と考えてぞつとした。背筋がひやつとする。私は、とんでもない人に目を付けられたのでは？

「ヴァ〜レ〜ン〜デ〜ア〜」

地響きのように低い声が陛下の後ろから聞こえてきた。

「貴方ね、何もするなつていったでしょ！ ま、まさかと思つけど、シート捲つたりしてないわよねっ!？」

現れたのは、燃えるように紅い髪をもった女性だった。しかも目が醒めるような美人で、二十代後半から三十代半ばといった感じだ。

「ユーリヤ。僕は捲つたりなんてそんな。暑そうだったので足元に寄せただけで」

しれつと言うが、セクハラだ。私はもっとしっかりシートを抱いた。

「なっ、何してるのよ！ イーガルもどうして止めないのっ！ 頼りにならないわね！」

「俺に本気のこいつが止められるとでも？ 貴方じゃあるまいし」

イーガルさんが溜め息を吐く。そんなにヴァレンディアさんはすごい人なの？

「私も無理よ。 ああっ、可哀想に！ ごめんなさいね、私が置いていったばっかりに！」

がばつと抱きつかれてぎゅっぎゅっとう締められる。苦しいです…  
…胸で圧迫されて。

「あのっ、えっと」

「でもね、安心して！ 私が来たからにはヴァレンディアに指一本も触らせないわ！ それに服を持ってきたのよ。娘の物なんだけど、どうかしらっ？」

離れたかと思えば、体にシーツの上から服を当てられる。腰の辺りで絞られたシャツワンピースのような感じだけど、襟の所や裾に金髪が似合いそうなふりっふりのレースがこれでもかっ、と付いている。丈は多分膝少し下くらいだろうか。ぴったりだった。レースはともかく。

「あの子が10歳頃のためから心配してたんだけど大丈夫そうね」

……大きくないですか？

「さて、貴方 名前は？」

「あ、心です」

「ココロね。私はユーリヤよ。」ココって呼ぶわね。良いかしら?」  
「はい。ユーリヤさん」

お姉さんってこんな感じかな。男兄弟しかいないから、わからないけど。

ユーリヤさんは艶やかに笑う。お子さんがいるように見えない。

「ふふ可愛い。女の子ってこうじゃないとね。 さて、みなさん。ココが着替えるから、出て行って頂戴」

ユーリヤさんが振り返って言うと、二人は文句も言わずに出て行ってくれた。

あれ、そういえば、誰か忘れてない……?」

「ココロ……」

みぎやっ、なんか耳元で聞こえました!

「可愛い名前だね。君にぴったりだ」

うつかりしていた。この変態がいたのに、ぼろっと言ってしまったなんて。ユーリヤさんとの会話に割り込んで来なかったのは、まさか名前を聞き出す為に黙ってたとか?

ヴァレンディアさんは私の頬を舐めるようにねっとり撫でた。みぎゃあああ! ユーリヤさん助けて、と見ても一向に振り向く気配はない。いや、微かに動いている。まさか、拘束ってやつ?

「僕の名前も呼んで欲しい。ヴァレンディア いや、ヴァルと」  
「ヴァル、さん……ぶっ」

ユーリヤさんが大変なのに、つい笑ってしまった。ヴァルさんって某殺虫剤の名前か！（ちょっと違うけど）駄目だこの美形で殺虫剤……。ひとしきり笑った後、目を丸くしているヴァルさんに言った。

「ヴァレンさんって呼びます」

私の心の平穩の為に言っただけなのだが、何を勘違いしたのかヴァレンさんはとろけそうな笑みを向けてくる。心臓に悪いレベルだ。美形って怖い！

「ココロ！ さあ早速この書類に……」

「書きませんし書かないで下さい！」

「そんなこと言わないで……」

みぎやっ、シーツの上から太腿を撫でられています！ そうつと指先が触れるか触れないかという風にしてたかと思えば、手のひら全体で感触を楽しむように撫でられ、あらぬところがぞくぞくするようないような……。うっ、乗せられちゃだめだ！

くすぐつたい感覚を我慢していると、いきなり腕を引かれ豊満な胸に引き込まれた。

「もっつ、やっつと解けたわ……。ヴァレンディア貴方こんなものまで持って！ 結婚は神聖なものよ！ 女神ストーレイの名の下に行く」

やっぱりあれは婚姻届的なものだった！ ヴァレンさんから逃れられたことと、判明した書類の用途に呆気に取られてユーリヤさんの言葉も頭に入っていない。

しかもさっきのヴァレンさんのあれはなんかこう、保健体育な感

じだった！ 先を想像して恐ろしくなる。考えてもみる私、あんなイケメンの前で素っ裸を晒せるか？ 否！ 猫の時でもあるまいし、絶対無理だ。猫には毛というものがあつた。服を着せる飼主もいるそうだけど、基本的に裸だ。猫ならそういうものだと思つていいから良い。だけど人は別だ。私みたいにドラム缶のような寸胴は他人には見せられない！ 勿論見せる気もない。

「とりあえず！ ココは私の家で預かります！！」

「駄目だ！」

「えっ？ 本当ですかユーリヤさん！」

天の助けだ！ このままでは強制的にヴァレンさんに嫁入りさせられる。それはなんとか回避しなければ、操が危ない気がする。否、気がするではなく確実に！ ほっとする私と裏腹に、ヴァレンさんはユーリヤさんの提案に首を振った。

「駄目だ駄目だ！ 貴方の家は男ばかりなのに。ココロに目を付けたらどうしてくれる！」

「女の子もちゃんというわよ」

「フイメアだけだろう！ ラロなんて年頃だし……とにかく駄目だ、ココロは僕のだから！」

駄々っ子か！ 危うく口に出してつつこみかけた。しかし、ユーリヤさんの次の言葉には自制が利かなかった。

「婚姻前の男女の同居は認められないわ！」

「結婚前提ですか！？」

ユーリヤさんは私の味方だと思っていたのに！ がーんとショックを受けた私にこそっとユーリヤさんは耳打ちした。

「とりあえずこう言っておけば、文句は言えないでしょ？」

なるほど。別に結婚するとかは確約したわけでもないし、ヴァレンさんと私が婚姻前なのも本当だ。

「ヴァレンさん、私、ユーリヤさんのところで色々教わりたいです。駄目ですか……？」

そつと、ヴァレンさんの手を握る。これでもうセクハラはされまい。我ながらナイスな防止策だ。

ヴァレンさんの目を見てお願いする。虎さんなら、これで分かってくれていた。それにしても虎さんだった時も大きいと思っただけ、人になっても背が高い。私は日本人の標準で足が短くて座高が高い筈なのに、ヴァレンさんをとっても見上げなければならぬ。じつと見つめっていると、ヴァレンさんは標準を硬直させて呻いた。

「うぐっ……ココロ……貴方という子は……」

「はい？」

「わかった。但し、条件がある」

条件。一体何がくるのか。変態と認定したヴァレンさんだから、思わず手に力がこもる。そしてヴァレンさんは真面目な顔で言い放った。それはもう堂々と。

「一つ、僕もユーリヤの家に住む。二つ、僕とココロは一緒に寝る」「無理です！ 特に二つ目っ！」

何故同衾しなければいけない!？

「そうよ！　うちに余分な部屋は無いんだからね」

「ドウイリオが増築させたと聞いたが、聞き間違いだったのかな。今年も作る気満々だと話していたみたいけど」

ちらりと横目で見て言った言葉にユーリヤさんは顔を髪と同じくらい真っ赤にさせた。何をやる気？　増築だから家？

「……それに、僕はココロと一緒に部屋が良いんだ。ねえ、ココロ。君もその方が安心でしょう？　この数ヶ月、君を守ってきたのは僕なんだよ？」

うつ……。それを言われると辛い。確かに私1人、というか1匹では生き残ることはできなかつただろう。それ程全てを虎さんに依存して生活していた。それでも、今の虎さんに依存するかと言うと別だ。どうしてもあの虎さんとこの美形かつ変態な人が同一だと考えたくない。

虎さんなら、なあ……。

「あ」

「どうかしたの？」

「あの、……私は寝るときに虎さんなら構いませんけど……」

その言葉にユーリヤさんは首を振った。

「だめよっ！　そんなの許したら寝てる間に、」  
「ユーリヤは黙っていてくれないかな？」

ぴたりとユーリヤさんの動きが止まり、顔が悔しげに歪む。



拘束をかけられている！

人を自分の思うままにするなんて、その人の意思を無視する行いだ。私はヴァレンさんを睨み付けて詰った。

「ヴァレンさん！ ユーリヤさんの拘束を解いて下さい！ 酷いです！ き、嫌いになります！ 一緒に寝ませんっ」

最後の2つはそれ程意味はないだろうと思っていたのだが、私は変態を見誤っていたらしい。ヴァレンさんは必死な形相で私の手を握り、懇願するように迫ってくる。

「あああっ、嫌だ！ 嫌いなんて言わないでくれ。もうしないから、寝るときにはちゃんと口付けも……」

なんか、どさくさに紛れて付け加えてませんか？  
ユーリヤさんも諦めてか、大きな溜め息を吐いていた。

ちゅーはしませんっ！

## 2 子猫の名前（後書き）

会話分多くてすみません。どうしても話せる人が出てくるところな  
ってしまいます……。

次回はユーリヤさんの家です。ふりっふりの服が似合う可愛い女の  
子がいるのはお楽しみに。

誤字脱字、感想などがあれば頂けると嬉しいです。

ここまでご精読ありがとうございます。

### 3 オールトン家(1)

駄々っ子なヴァレンさんをなんとか宥め賺して部屋を出て行ってもらい、その間に着替えた。目を瞑ったり、後ろを向くだけではなんだか心許なかった為だ。透視とか、後頭部に第三の眼の開眼くらい、ヴァレンさんなら簡単にやりそうだ。あれ？ そうなると部屋から出すくらいでは覗き防止不可能……？ いやいや、そんなまさか。そんな私の不安を余所に忍もかくやといった素早さで彼の人は駆け寄ってきた。

「ああつ、ココロ！ フィメアの服だつてというのが少し気に入らないが、その膝なんて見てるだけでそそるね……。ユーリヤの家なんか行かずに今すぐ食べてしまいたいくらい、可愛いよ」

きらっきらの笑顔を見せてくれるが、またその台詞がなんとも不穩だ。視線で頭の前から爪先まで舐め回されているような気になる。しかし、膝つてマイナー……。中学校、高校と只管徒歩通学で文化部だった私の膝に何があるとも思えないのだけだ。

ユーリヤさんから貸して頂いた爽やかなブルーのワンピースは白のふりふりレースがシンプルなそれに甘さをプラスしてくれているが、どうも着心地が悪い。私なんかこんな一歩間違えばロリータなものを着てすみません、と土下座で謝りたくなる代物だ。ユーリヤさんが用意してくれたものだからしないけど。それこそ似合わないさすぎて申し訳ない。

ヴァレンさんの手からなんとか逃れてユーリヤさんの背中に隠れる。こそつと覗くと、手をわきわきさせていた。みぎゃあ！ なんか怖いんですけど……！ ヴァレンさんは黙つていればイケメンの筈なのに、残念な感じにしか思えない。態度かな、やっぱり……、と考え込んでいると目が膝より下、足元に向いていることに気が付い

た。

「そついえば、靴は？」

室内だから日本と同じ感覚でいたのだけど、見るとヴァレンさん達はきちんと靴を履いている。室内の様子から考えて文化は欧米のようなものだったらしい。それにどの道、外に出るのだから必要になることは間違いない。

「やだ！ 忘れてたわ。うーん、歩きはちょっとキツイわね……。

ヴァレンディア、貴方ウチまで送りなさいよ」

「そつだな……。ココロ、おいで？」

その「おいで」はなんですかっ！？ その腕には飛び込みませんから！ 誰がそんな危険に自ら飛び込むような真似をするか！

「術者に触れていないと同じ場所に上手く飛べないんだ。それに、より多く触れている方が確かだからね。途中で知らないところに放り出されたくはないだろう？ だから、おいで。抱いてあげる」

なんか、最後の台詞が艶めいて聞こえるのは気のせいか。お子ちゃまは立ち入り禁止なめくるめくむにやむにやあはーんな世界に連れて行かれそうな予感がする。『だっこしてあげる』と同じ意味の筈なのに、なんだこれは！ しかも、確かイーガルさんがヴァレンさんを連れて帰る時、彼自身には触れていなかったような気がする。これは、騙されてるのだろうか。だっこしたいが為に？ ……ありえそつで怖い。

「嘘を教えない！ ココあのね、ヴァレンディアの言ったことは殆ど嘘だから、騙されちゃ駄目よ」

首を傾げる私に、ユーリヤさんが説明してくれる。勿論、身悶えしている変態は無視することにした。

ユーリヤさんによると、魔術というのは世界に蔓延する神様の力を利用して行使するものらしい。まず、神様がいるというのが驚きだが、人の前に現れることはまずないようだ。原始の時代に魔術を授けた時にその姿を見せた、と今では伝承が残るだけだ。その辺りのことは本を貸してくれると言われたが正直、読めるとは思えない。言葉が通じていることさえ不思議なのに。……とまあ、それは置いておく。

火を熾すなら、火の神の力を陣を用いて集束し、人の世のものに転換をする。水を出す場合も、同様らしい。しかし、先程イーガルさんが使った空間転移はそれとは少し違い、陣を2つ使用する。まず、闇の神の力で陣の内にあるものをこの世のものとは分離させる。そして、それは対応するもう一つの陣に引かれ、そこで光の神の力を使いこの世のものに再転換するらしい。だから、陣が不完全だったり途中で邪魔が入ると、別の陣に引かれて正確に目的地へ辿り着かないということや、指が一本無くなることがあったりなったりするらしい。こわっ！ 確かな実力のある魔術師しか使えないから大丈夫だとユーリヤさんは言ったが、それにしても失敗のリスクが高すぎる。どこでもドアとかそんな、ネコ型ロボットが簡単に出してくれるものじゃない。気付いたら腕一本無くなってたらどうするの！？ 絶対いやだ。しかし、何か忘れてしているような気もする。首を捻る私を余所にユーリヤさんは締めくくる。

「……まあ、というわけで、対象が陣にさえ入っていれば、術者とはくっ付いていなくても良いのよ。魔術師が移動しない場合もあるわけでしょ？」

だっこは必要無いということはわかったけど、それと同時に恐る

しさも知ってしまった。青ざめる私に、ぴとりと暖かいものがへばりついた。それと同時に太腿の辺りから何かが這い上がったきた。

「大丈夫だよ、ココロ。僕は世界で一番すごい魔術師だからね。君の為なら何だってできる」

勿論それはユーリヤさんの説明の間黙って悶えていたヴァレンさんだ。私を後ろからそっと抱きしめ、青くなつた顔を優しく撫でてくれる。もの凄く陳腐な台詞を言ったが、そこにいやらしさは全く無く、うっかり信じてしまいそうになる。

先程までのセクハラ発言と現在私の尻をさする不埒な手さえ無ければ。

「……ありがとうございます。ですが離れてください」

振り向き様に、につこり笑って牽制。体をずらしてその腕から抜け出す。が、むずと片方の尻を服の上から鷲掴みにされた。服と言つても薄いワンピースみたいなのだから、指の形がダイレクトに伝わってしまう。

「みぎゃあ！ 揉むなっ！」

昔親戚に安産型って言われたことがあるくらいだから、掴み易いのかもしれないけれど、セクハラ反対！

「ちょっとヴァレンディア！ 良いこと言つたかと思えば直ぐそれ！？ 夫婦でも無いのにお尻なんて触っちゃ駄目でしょ！」

「そうです！ 私のおしりなんて触つても何も良いことなんてないです！ ていうか破廉恥です！」

「だから、結婚すると言っているだろう？ なんならストレイネス

の前で誓約しても良いよ」

こちらを全く見ないでヴァレンさんはユーリヤさんの抗議に応える。私を華麗に無視した。しれっとした顔でセクハラしておいての態度が頭にきた私は、対抗手段としてお尻を撫でるの手首を掴んだ。ぴく、と反応して手が止まる。そして、指を手の甲に滑らし手を重ねて、指の股の間から自分のそれを差し込んだ。やっぱり手を繋いでいないと危険だ、この人。溜め息を吐いてから目の前の人を見上げると随分満足げな顔をしている。

まさか、最初っからこれが目的……！？　　そういえば、初めに本来の要求より無理な要求をすると上手く事が運ぶとかなんとか聞いたことがある。

「……まあ、今は我慢しておいてあげる。ココロに嫌われたくないしね」

ずっと駄目ですよ！　と声を大にして言いたかったが、言ったら最後どうなるか分からなかったので黙って手を繋いでいたら、何故かぱっちり恋人繋ぎに直された。

「とりあえず！　ヴァレンディア、移動しましょ」

空間転移というものか、と体を強ばらせるとヴァレンさんが私を安心させるように手に力を込めた。見上げると、優しい笑み。変態さを一切感じさせないそれに、また絆されそうになる。が、

「怖いなら、抱いてあげようか？」

「結構です！」

どこまでもヴァレンさんはヴァレンさんだった。無駄な色気ぶん

ぶんさせて！　ふいと顔を背け、秀麗な顔を見ないように努める。

「ココロは本当に心配症だね。でも、僕を信じてほしい。絶対に、危険な目には合わせない」

「……なら、もうお尻触りませんか？」

私にとって一番危険なのはヴァレンさんだということはもう分かりきっている。ぎゅうと手を握りしめると、ヴァレンさんはうつと言葉を詰まらせ、宙に目を泳がせて少しだけ悩む素振りを見せた。だが、長い沈黙の末にぼそぼそと出てきた言葉は予想通りだった。

「……………善処する」

確約はしてくれないのね。なんとなくわかってたけど！　溜息を吐き内心肩を落としていると、ばしとユーリヤさんがヴァレンさんの頭を容赦なく叩いた。

「いたいな」

「はつきり言いなさいよ」

それからユーリヤさんは私に向き直ると、じっとユーリヤさちらを見る。その瞳の奥が赤くゆらりと揺れたような気がした。

「ココが怖がるのは解るわ。だけど、ヴァレンディアは大丈夫よ。あなたに対しては少しおかしいけどね、彼は五指の魔術師だから、安心なさい」

『五指の魔術師』って、ナニ……？　と目を瞬かせた刹那、周りが色を変えた。



「ほら、大丈夫だったでしょう？」

ユーリヤさんは満足げに笑う。

『大丈夫』。確かに私は大丈夫だった。いつ魔術が発動したのかも解らないくらい一瞬の出来事だった。瞬きの間に豪華なベッドが在った室内から、日の光が暖かい屋外に移動していた。周りを見渡すと、青々とした葉が茂る樹が沢山生えている中の開けた場所に家が在る。

「さて、行きましょ。この距離ならココは私が」

ユーリヤさんが言い終わらない内に私は抱き上げられていた。しかも横抱き。所謂お姫様抱っこというやつだ。乙女の憧れなのだが、背中と膝の裏に回された手には嫌な予感しか感じない。

「みぎやっ！ ヴァ、ヴァレンさん！」

「お尻は触らないから、暴れないでほしい」

「とか言って次は別のところ触るつもりでしょう」

「……心外だな」

心配そうなユーリヤさんに大丈夫だと笑いかける。ヴァレンさんは困ったような顔をしてみせているが、実先程からずっと困っているのは私だ。それに、誰がこの台詞を言わせたと思っっているんだ、この人は。多分、ヴァレンさんが普通の態度でセクハラをしなければ、もっと素直にこの綺麗な顔に胸をときどきさせて、乙女の反応を返せた筈だ。虎さんとの生活の時に嘗め回されたのは、上手く蚤取りをできない私を見兼ねてのことだったから許せる。というかあの生活では虎さんにおんぶにだっこだった為大変申し訳なく思っている。あれをセクハラと考えると私の中の何かを無くす気がする。あの時は猫だからセーフ！ セーフったらセーフ！

それにしても、これからは人に戻れたし、厄介になるのだからユーリヤさんの家ではそれ相応の働きをせねば！　そう決意を固めている間に家の周りにある柵を通り過ぎ、家はもう目前に迫っていた。赤茶色の煉瓦を積み上げて出来た家。真ん中だけ二階建ての家屋になっており、そこから一階部分だけ左右に飛び出している。全体的な大きさとしては日本の一般的な住宅より少し大きい位だろう。

「漸く到着ね。少し、賑やかだけど、歓迎するわ。ココ」

ユーリヤさんが私達よりも先に立ち、扉を開けようと手を掛けた。しかしその時、先に内側から扉が開いた。

### 3 オールトン家(1)(後書き)

約二か月と一週間ぶりです……。定期更新できず申し訳ないです。寝ぼけながらの投稿なので、加筆修正を行うやもしれません。誤字脱字もありましたら報告お願いします。ここまで読んで下さり有難うございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0019r/>

---

虎と子猫

2011年5月14日02時14分発行